

野津原町探訪

六月六日 佐伯史談会

野津原町とはどんな所であろうか。野津原というから高原状の所だろうか、など思いながら大分川の支流七瀬川に沿って上る。やがて町の中心部野津原に入る。川に沿ってあまり広くない平野がひらけている。車は町はずれの立派な中央公民館前にとまる。この頃はどこのも役場と公民館はすばらしい建物だ。しばらく待っていると案内役をつとめて下さる社会教育委員 御手洗 馨氏が出て来られた。

公民館を出るとすぐ急坂にかかる。あまり広くないが高原状である。点在する家の側に旧参勤交代道がちらちら見える。

進むにつれて山国の感が深くなる。棚田が多い。所々で田植えをしている。珍らしい手植の風景に車窓からカメラを向けるが、すぐ通りすぎてしまう。

野津原宿



道の石畳の市今

野津原町は旧野津原村と旧今市村の合併した町である。旧野津原村は肥後藩の飛地領であった。加藤清正が関ヶ原の戦の恩賞として、小西行長（西軍のためとりつぶされる）の旧領地を合せて、肥後一国の領主となった。その時清正は、天草郡を辞退して代りに豊後二万石を願い出た。その結果宛行われたのが、直入郡久住・大分郡野津原・鶴崎・佐賀関の四カ所であった。その中、江戸出

府の宿場を久住・野津原・

鶴崎に設けた。

寛永九年（

一六三二）二

代藩主加藤忠

広が改易とな

り、小倉城主

細川忠利が封

ぜられたが、

豊後二万石は

そのまゝ肥後

藩領となり、

引続き宿場町として利用された

今に残る今市の石畳道

肥後藩領野津原に対して、今市は岡藩領である。ここは参勤交代時に休憩するお茶場であった。今に残る県文化財の石畳道は、参勤交代道路の一部であった。



丸山神社楼門

石畳は巾八
・五mの道の
中央に、巾二
・一mに敷き
つめられ、全
長六六〇mが
残っている。
上町と下町を
かぎ状に道を
折って境界と
し、宿場町全
体が見通され
るのを避けて
いる。

石畳は現代生活には不便なので、敷石の上に盛土されていたが、地区民にとって新しいパイパスが完成されたため、文化財保護の立場から盛土をはぎ取り、昔の石畳道にしたという。お陰で我々は今日、三八〇余年前に造られた立派な石畳道を見ることができ、車社会の今日、道路の両側の住民にとっては、やはり不便なことであらう。

文化財保護と住民生活の両立はむずかしい時代になった。

日暮しの門

日暮しの門と言えば、誰れでも日光東照宮の陽明門を考えるが、今市の丸山八幡宮の楼門も日暮しの門と呼ばれているという。

一行はこの名称に期待をいだいて石段を登る。期待通り立派な楼門である。こんな山間の僻地にどうしてこんな立派な楼門があるのだろうか。

慶長年間に加藤清正が建築したと伝えられている社殿は火災で焼失、現在の建物は再建されたもので、同社の棟札によると、拝殿は元禄十三年（一七〇〇）に建築さ



後藤家住宅

れており、楼門は享保五年（一七二〇）に建築されたと
 して、彫刻や屋根裏の柱組はすぐれ
 ている。
 この楼門はこの地の豪商松田長右衛門尉長次が、父母
 の長命と子孫繁栄を祈念して寄進したという。日暮しの
 門と言われるだけあって、彫刻や屋根裏の柱組はすぐれ
 ている。

十二支の動
 物、農作業及
 び酒づくりの
 過程が順序よ
 く刻まされてい
 るもの、二十
 四孝中の寒中
 の荀を涙して
 掘るものなど、
 立派な彫刻で
 ある。
 おしいこと
 に楼門の所々
 や彫刻の一部

が破損している。色彩もほとんどはげ落ちている。今の中
 に修復しないと、この貴重な文化財はとりかえしのつか
 ないものになるだろう。

後藤家住宅

マイクロバスはやっと通れる山間の小道を、縫うよう
 にして奥へ奥へと進む。知らぬ道は遠い。案内者がいな
 いと引き返すかも知れない。

やっと杵ヶ原の後藤住宅にたどりつく。どっしりした
 茅葺の直屋である。国指定重要文化財だけあって、立派
 な説明書も用意されている。

桁行十四桁梁間七・七桁寄棟造である。

後藤は、小庄屋を勤めていたと伝えられるほか明らか
 でない。建築年代を示すものは何もないが、建築手法か
 らおよそ十八世紀中頃（明和―天明）の建築と考えられ
 ている。

後藤家住宅は県下では年代が古く、当地方における直
 屋農家の好例として価値が認められ、昭和五〇年六月に
 国指定を受け、同五年四月―十二月保存修理工事が
 行われ、復元されて往時の姿を見るに至ったという。



神 角 寺 本 堂

造で屋根は檜皮葺、屋根の四隅の湾曲の

こんな山奥の小集落だからこそ残っていたのであろう。有難いことだ。
 昼食は木辻峠に案内され、後藤家の人々が作って下った山菜料理に舌鼓を打った。木辻峠は野津町との境で、県民の森の一部でもある。

神 角 寺 (朝地町)

神角寺(標高七五〇m)

の本堂は小さいが美しい建物である。(

国指定重要文化財昭和二五年指定) 小さいが富貴寺によく似ている。単層の宝形

状態や反り具合が実にすばらしい。桁行は三間、梁間も三間で四周に回縁があり、南面は部構しとみえになっている。和様唐様を自由にあつかった建築様式の建物で、室町時代の芸術をよく表現しているといわれる。
 小さな山門の二王像も近年重文に指定され、一体は現在修理に出されている。

神角寺一带は、大友氏が入部の建久七年(一一九六)大友氏の家臣古庄重吉と、豊後大神一族で大野荘司の大野泰基が迎え討った古戦場と伝えられ、大野泰基は戦死しその墓(宝篋印塔)が、本堂の前の参道わきに移されて苔むし淋しくたっている。

寺伝によると、この戦いで多くの堂塔はすべき焼失したという。その後応安二年(一三六九)に大友氏が再興し、六坊が建てられたが、その後再び荒廃した。

現在の本堂は、その時の東の坊といわれ、この建物だけが補修を何回か受けながら、昔の名残りを伝えてくれている。

ここは石楠花の名所でもある。

飛来山靈山寺(大分市)